

展示会

赤い鳥

創刊
100年

作品と作家たち

誌面を彩った

Commemorating the 100th anniversary of the founding of Akai tori
- authors and poets who contributed to this legendary children's magazine



「赤い鳥」複製版 14巻1号
日本近代文学館 1968 (表紙絵 清水良雄)



International Library of Children's Literature

国立国会図書館 国際子ども図書館

- ◆ 雑誌『赤い鳥』とは 1
- ◆ 誌面を彩った作品と作家たち 3
- ◆ 今も読まれている作品 13

◆◆◆ はじめに ◆◆◆

日本の児童文学史の中で、子どもは純粋な存在であるという児童観に基づいて童話や童謡がさかんに書かれた時代がありました。この時代を築ききっかけとなったのが、1918（大正7）年に創刊された雑誌『赤い鳥』です。

この展示では「『赤い鳥』創刊100年一誌面を彩った作品と作家たち」と題して、『赤い鳥』で活躍した作家とその作品を紹介します。

📖 雑誌『赤い鳥』とは

大正デモクラシーの時代に当たる1918（大正7）年、鈴木三重吉は『赤い鳥』を創刊し、それまでの教訓的なお伽噺や大衆的な子どもの読み物ではなく、芸術性の高い作品を目指す文学運動を始めました。『赤い鳥』は子どもの純粋無垢な心を描こうとしていました。

「赤い鳥」の標榜語
『赤い鳥』複製版 1巻1号から
日本近代文学館 1968



『赤い鳥』の主な読者は都市に住む新中間層でしたが、子どもの個性を尊重する、児童中心な自由主義教育を行う教師に支持され、地方でも受容されていきました。誌上には投稿欄が設けられ、様々な地域の子どものたちからの作品も掲載されました。当初は、三重吉が協力を呼びかけた芥川龍之介や小川未明のような著名作家の活躍が目立ちますが、やがて『赤い鳥』に見出された新美南吉や坪田譲治のような新進作家が雑誌の中心を担っていきます。他にも多くの作家や詩人が、童謡、昔話や外国文学の再話、科学読物、児童劇などの豊富な読物を提供し、創刊から1936（昭和11）年の終刊までの全196冊を支えました。

コラム 1 『赤い鳥』の画家たち



『赤い鳥』複製版 1巻1号
日本近代文学館 1968
(表紙絵 清水良雄)

『赤い鳥』では、様々な画家が表紙絵や挿絵を手がけ、子どもたちをひきつけました。中でも鈴木三重吉に信頼され、主任画家として多くの絵を描いた清水良雄は、同誌を代表する洋画家です。清水の都会的な画風は、当時の読者に新鮮な印象を与え、『赤い鳥』のイメージの形成にも貢献しました。

いるど 誌面を彩った作品と作家たち

すずき み え き ち ◆ 鈴木三重吉 (1882-1936)

ロマン主義的な作品を書く、^{なつめ そうせき}夏目漱石門下の作家でした。しかし、次第に小説の執筆^{しつぷつ}に行きづまり、出版を手がけるようになります。1916（大正5）年に、外国作品を^{ほんやく}翻訳・再話する形で童話集『湖水の女』を刊行したことを機に童話の世界に活路を見出し、続けて『世界童話集』を出版しました。それらを^{あしが}足掛かりに、1918年に『赤い鳥』を創刊します。

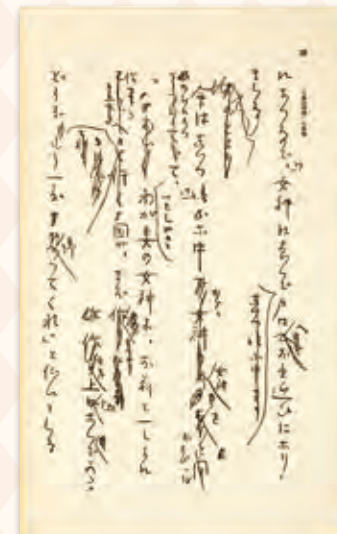


『鼠のお馬』
鈴木三重吉 編 清水良雄 装畫
春陽堂 1917
(世界童話集；第2編)



『星の女』
鈴木三重吉 編 清水良雄 装画
春陽堂 1917
(世界童話集；第3編)

編集者として、様々な作家・詩人の童話や童謡^{どうよう けいさい}を掲載する一方、^{み え き ち}三重吉自身も数多くの作品を『赤い鳥』に発表しました。イザナギ・イザナミによる国生み・神生みの物語「女神の死」をはじめ日本神話をやさしい表現・文体で紹介した「古事記物語」は、その代表作です。



「古事記物語」原稿
『赤い鳥』複製版 復刊12巻3号から
日本近代文学館 1968

他にも、「不思議の国のアリス」を原作とする「地中の世界」、現在は「家なき子」のタイトルで知られる「ルミイ」など、外国作品の子ども向け再話をたくさん生み出しました。



「地中の世界」鈴木三重吉 著
『赤い鳥』複製版 7巻2号から
日本近代文学館 1968



「ルミイ」鈴木三重吉 著
『赤い鳥』複製版 復刊4巻5号から
日本近代文学館 1968

◆ 北原白秋 (1885-1942)

北原白秋は、1909（明治42）年に詩集『邪宗門』を、1911年に詩集『思ひ出』を刊行するなど、早くから文壇で注目を集める歌人・詩人でした。



『邪宗門』
北原白秋 著
易風社 1909

1915（大正4）年から鈴木三重吉との交流が始まり、ともに明治期の教訓的な学校唱歌に批判的だったことから互いに理解を深め合いました。三重吉から『赤い鳥』への参画を依頼された白秋は、童謡の創作と投稿される自由詩の選者を引き受けることになりました。



『りす〜小栗鼠』 北原白秋 作
『赤い鳥』複製版 1巻1号から
日本近代文学館 1968

白秋の童謡には、明治以来の教育で失われた「童心」を取り戻すという信念があり、わらべうたの延長として、言葉遊びなどのユーモアも含めた自由な童謡を追求しました。『赤い鳥』創刊号に掲載された「りす〜小栗鼠」を始め、「赤い鳥小鳥」、「あわて床屋」、「この道」、「からたちの花」など、1933（昭和8）年に三重吉と衝突して『赤い鳥』と訣別するまで、誌上に数多くの童謡を発表しました。



『赤い鳥小鳥』 北原白秋 作
『赤い鳥』複製版 1巻4号から
日本近代文学館 1968



つづりかた 児童綴方・児童自由詩

『赤い鳥』は、子どもの自由な表現を促す運動の一つとして、子どもたちから綴方（作文）や詩を募集していました。鈴木三重吉が綴方の選、北原白秋が詩の選に当たり、子どもたちの素直な表現を推奨する指導を行いました。子どもの自己表現の開拓という観点からも、『赤い鳥』は大きな役割を果たしたのです。

◆ ^{あくたがわりゅうのすけ} 芥川龍之介 (1892-1927)



「蜘蛛の糸」 芥川龍之介 著
『赤い鳥』複製版 1巻1号から
日本近代文学館 1968

「鼻」や「^{らしやうもん}羅生門」などで知られていますが、童話も発表しています。^{なつめそうせき}夏目漱石門下の先輩だった^{すずきみえきち}鈴木三重吉の依頼により、『赤い鳥』創刊号に掲載された「蜘蛛の糸」から童話を書き始めました。その後も「^{まじつ}魔術」、「^{とししん}杜子春」、「アグニの神」といった作品を世に送り出しました。

◆ ^{おがわみめい} 小川未明 (1882-1961)

『赤い鳥』創刊以前から創作童話集『赤い船』を発表するなど、当時としては珍しい童話中心の作家として活動していました。「月夜と眼鏡」のような、戦後の教科書にも採用された優れた童話を数多く発表しました。



「月夜と眼鏡」 小川未明 著
『赤い鳥』複製版 9巻1号から
日本近代文学館 1968

◆ ^{ありしまたけお} 有島武郎 (1878-1923)

^{しらかば}白樺派として活動し、「^あ或る女」などの大人向けの文学で知られる一方、子どもの内面の描き手でもありました。『赤い鳥』掲載作品は、1920(大正9)年8月の5巻2号に載った「^{ひとふさぶどう}一房の葡萄」のみですが、^{ぬす}盗みを行った少年の罪の意識と和解を描いた本作は教科書に採用されるなど、多くの人々に読まれました。

◆ ^{くすやままさお} 楠山正雄 (1884-1950)



『日本童話宝玉集 巨人版』
楠山正雄 編
初山滋 岡本帰一 早川桂太郎 川崎福太郎 装幀と挿畫
富山房 1938

^{ふざんぼう}富山房で編集者として働きながら『赤い鳥』に作品を発表しました。^{すずきみえきち}鈴木三重吉と同様に、作品のほとんどを再話が占めています。1938(昭和13)年刊行の、日本の昔話や神話、^{とぎばなし}お伽噺などを題材にした話をまとめた『日本童話宝玉集』は、楠山の代表作です。

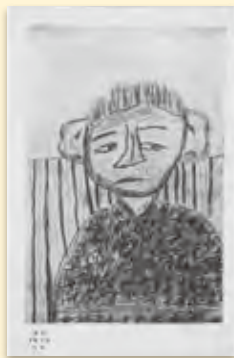
◆ 坪田 譲治 (1890-1982)

第一童話集『魔法』の表紙絵を描いた深沢省三の紹介で「河童の話」の原稿が鈴木三重吉にわたり、『赤い鳥』に掲載されました。それ以降、1936（昭和11）年10月の『赤い鳥』最終号（復刊12巻3号）の「石屋さん」に至るまで、40もの作品が『赤い鳥』の誌面を飾りました。



児童自由画

『赤い鳥』は、手本の真似ではない自由な描写を奨励して、子どもたちから絵も募集していました。その選には洋画家・版画家の山本鼎が当たりました。子どもたち自身の目で見えて感じたものを描くよう指導しました。



自由画
山本鼎 著 『自由画教育』から
アルス 1921



自由画
山本鼎 著 『自由画教育』から
アルス 1921



『自由画教育の要点』
山本鼎 [著]
山本鼎 [1920]

◆ 三木 露風 (1889-1964)

童謡「赤とんぼ」の作詞者です。早くから詩人としての地位を確立し、北原白秋と並んで「白露時代」を築きました。『赤い鳥』では、1918（大正7）年8月の1巻2号に童謡「毛蟲採」が掲載され、その後も「冬の歌」、「おやすみ」など8編を誌上で発表しました。



「毛蟲採」 三木露風 作
『赤い鳥』複製版 1巻2号から
日本近代文学館 1968

◆ 西条 八十 (1892-1970)



「かなりや」 西条八十 作
『赤い鳥童謡画集』 西条八十 篇 歌をわすれたかなりや から
与田準一 等編 清水良雄 装幀 武井武雄 初山滋 川上四郎 画
小峰書店 1949

無名の詩人だった頃から『赤い鳥』に童謡を書き始めました。西条八十が作詞し、成田ためぞうが作曲した「かなりや」は、1919（大正8）年5月の『赤い鳥』2巻5号に掲載されました。創刊当初は童謡に曲を付けていなかった『赤い鳥』において、「かなりや」は、最初の曲譜付き童謡となり、これ以降多くの童謡に曲が付けられました。

◆ 巽聖歌 (1905-1973)



『雪と驢馬：童謡集』復刻版
巽聖歌 著 深澤紅子 装幀 挿畫
大空社 1997
(叢書日本の童謡)

1925 (大正 14) 年に『赤い鳥』に投稿した「水口」という作品が北原白秋に激賞されたことをきっかけにその門下となり、童謡作家としての活躍が始まりました。白秋に教示を受けた童謡作家の中で最も早く、1931 (昭和 6) 年に第一童謡集『雪と驢馬』が出版されました。童謡「たきび」の作詞者としても有名です。

◆ 与田準一 (1905-1997)



『乳樹』1 巻 1 号
乳樹社 1930
原本所蔵：大阪府立中央図書館国際児童文学館

『赤い鳥』への投稿作品が北原白秋に認められ、その門下となりました。巽聖歌らと一緒に童謡の同人誌『乳樹』を創刊して活躍の幅を広げ、1933 (昭和 8) 年に第一童謡集『旗・蜂・雲』を刊行しました。戦後発表した童謡「ことりのうた」は、今でも歌われています。

◆ 新美南吉 (1913-1943)



『手毬と鉢の子：良寛物語』
新美南吉 著 清原齊 畫
學習社 1941
(學習社文庫)

「どん狐」などの童話も創作していた南吉ですが、『赤い鳥』への投稿は童謡から始まりました。1931 (昭和 6) 年に「窓」という作品で入選して以降、数々の童謡が掲載されました。南吉の生前には、伝記物語『手毬と鉢の子：良寛物語』、第一童話集『おぢいさんのランプ』の 2 冊の単行本が刊行されました。



『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号

鈴木三重吉は、1936 (昭和 11) 年 6 月に亡くなりました。これを受けて、『赤い鳥』復刊 12 巻 3 号は、鈴木三重吉追悼号として刊行されました。数々の作家たちが三重吉の思い出をつづった文章を寄せ、袂を分かった北原白秋からの寄稿もありました。遺稿となった「ルミイ」など、三重吉のこれまでの原稿も掲載されています。『赤い鳥』は、1929 年 3 月号刊行後に一時休刊したものの、1931 年 1 月号 (復刊 1 巻 1 号) 以降は刊行を続けてきましたが、この追悼号をもって終刊となりました。



『赤い鳥』複製版 復刊 12 巻 3 号
日本近代文学館 1968
(表紙絵 清水良雄)

📖 今も読まれている作品

『赤い鳥』に掲載された作品の中には、今も読み継がれているものがたくさんあります。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」や小川未明の「月夜と眼鏡」、坪田譲治の「魔法」などは、何世代にもわたって読まれてきた名作といえるでしょう。北原白秋の「赤い鳥小鳥」、「からたちの花」、西条八十の「かなりや」のような『赤い鳥』から生まれた童謡も、現在に至るまで広く親しまれています。



『蜘蛛の糸』
芥川龍之介 著 篠崎三朗 カバー絵 さし絵
ポプラ社 2005
(ポプラポケット文庫；371-1)



『からたちの花がさいたよ：北原白秋童謡選』
北原白秋 [作] 与田準一 編 初山滋 装画
岩波書店 2015
(岩波少年文庫；224)



『月夜と眼鏡』
小川未明 作 ナツコ・ムーン 装画
諸藤剛司 装丁
『小川未明 12 冊の本展』 Galerie Malle 2015

特に、1932（昭和7）年1月の『赤い鳥』復刊3巻1号に掲載された新美南吉の「ごんぎつね」は、1980年以降全ての小学校国語教科書に採用され、日本中の子どもたちに読まれるようになりました。様々な画家がイラストを描いた本も出版され続け、「ごんぎつね」は子どもたちだけでなく大人も魅了しています。さらに、英語、フランス語、ロシア語、中国語などにも翻訳され、今では海外の人たちにも知られています。

このように、『赤い鳥』の誌面を彩った作品は、現在も読者を増やし続けています。



『魔法』
坪田譲治 作 石倉欣二 絵
坪田理基男、松谷みよ子、砂田弘 編
稲川弘明 装幀
小峰書店 2005(坪田譲治名作選)



『ごんぎつね』
新美南吉 作 南伸坊 絵
宮川健郎 編 こやまたかこ 装丁
岩崎書店 2012
(1年生からよめる日本の名作絵どうわ；4)



『ごんぎつね』
新美南吉 作 柿本幸造 絵
前田景 装丁
講談社 2013
(講談社の名作絵本)



すずき み え き ち

鈴木三重吉と『赤い鳥』の年表

西 暦	和 暦	年 齢	出来事	その他の事項
1882	明治 15		9月29日 父悦二、母ふさの三男として、広島市猿楽町（現中区紙屋町）に誕生	1885年 北原白秋誕生
1891	明治 24	9歳	母ふさが亡くなる	1894年 日清戦争勃発 1895年 『小国民』廃刊、誌名を『少国民』に改める
1896	明治 29	14歳	広島県広島尋常中学校（現広島県立広島国泰寺高等学校）に入学	
1897	明治 30	15歳	『少年倶楽部』（北隆館）に『亡母を慕ふ』が掲載	
1901	明治 34	19歳	京都の第三高等学校に入学	
1904	明治 37	22歳	東京帝国大学英文学科に入学、夏目漱石の講義を受け感銘を受ける	日露戦争勃発
1905	明治 38	23歳	静養のため休学し広島県能美島（現江田島市）で過ごし、デビュー作『千鳥』の着想を得る	
1906	明治 39	24歳	『ホトトギス』9巻8号に『千鳥』掲載 4～7月 広島市の私立中学校の講師を務める 第二作『山彦』の構想を練る 9月 上京して漱石門下となり、高浜虚子らと親しくなる	『日本少年』創刊
1907	明治 40	25歳	1月 『ホトトギス』10巻4号に『山彦』掲載	
1908	明治 41	26歳	7月 大学卒業 父悦二が亡くなる 10月 千葉葉成田中学校に赴任、英語を担当する	
1910	明治 43	28歳	3月 『国民新聞』で長編小説『小鳥の巣』の連載開始	
1911	明治 44	29歳	成田中学校を退職後再び上京、海城中学校の教師になる 5月 ふちと結婚	
1912	明治 45 大正元	30歳	雑誌への寄稿や『返らぬ日』、『お三津さん』、『小鳥の巣』など出版が相次ぐ	
1913	大正 2	31歳	4月 中央大学の講師になる 7月 『国民新聞』で『桑の実』の連載開始	1914年7月 第1次世界大戦勃発 11月 『少年倶楽部』（大日本雄辯會講談社）創刊
1915	大正 4	33歳	3月 『三重吉全作集』（全13巻）の刊行を始める 4月 『中央公論』へ『八の馬鹿』を発表、以降小説の執筆を止める 5月 北原白秋と出会う	
1916	大正 5	34歳	6月 河上らくとの間に、娘すずが生まれる 7月 妻ふちが亡くなる 12月 童話集『湖水の女』を刊行	
1917	大正 6	35歳	4月 『世界童話集』の刊行を始める	
1918	大正 7	36歳	1月 河上らくとの間に、息子珊吉が生まれる 7月 『赤い鳥』創刊 海城中学校を辞職、中央大学を休職する	1919年 『赤い鳥一周年記念音楽会』開催 『金の船』（後に『金の星』と改題）創刊
1921	大正 10	39歳	10月 小泉はまと結婚	1922年1月 『コドモノクニ』創刊 1923年9月 関東大震災発生
1929	昭和 4	47歳	3月 『赤い鳥』を休刊する	7月 『金の星』終刊
1930	昭和 5	48歳	5月 『赤い鳥』の復刊準備に取り掛かる 綴方について全国で講演	
1931	昭和 6	49歳	1月 『赤い鳥』復刊	1933年 北原白秋と訣別
1935	昭和 10	53歳	8月 『綴方読本』の執筆を始める 10月 喘息のため病床に伏す 12月 『綴方読本』刊行	
1936	昭和 11		6月24日 病状が悪化し入院 6月27日 肺がんのため死去 10月 『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号が刊行	1938年 『日本少年』終刊 1939年 第2次世界大戦勃発 1942年 北原白秋が亡くなる（57歳） 1943年 新美南吉が亡くなる（29歳） 1944年 『コドモノクニ』終刊
1948	昭和 23		6月 中国新聞社「鈴木三重吉賞」制定	1962年 『少年倶楽部』終刊
1964	昭和 39		9月 広島で「鈴木三重吉 赤い鳥の会」発足	
1971	昭和 46		5月 東京で坪田譲治らが「赤い鳥の会」を設立、 「赤い鳥文学賞」制定（2010年終了）	

発行 国立国会図書館 2018年9月9日発行

編集 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
TEL 03-3827-2053（代表）
URL <http://www.kodomo.go.jp/>国立国会図書館
National Diet Library, Japan

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙でリサイクルできます。